長寿企業 新たな挑戦

大分県で地域フォーラム

飯倉氏

悩んでも迷わず

後藤　グローバル化というか、ボーダーを越えた地球規模の課題解決についてどう思われますか。また、各社にとっての経営上の直近の課題は。

飯倉　震災の影響はあるが韓国・中国のお客さまがとても多い。なぜここに来たかと問うと、ここでメードインジャパンの本当の文化に接することができたと言われ、うれしかった。私が16代目の当主ですと言わせていただくと、大きく拍手喝采が起きるので、それは国を越えてわかってもらえることだと感じた。常々思っているが、たくさん悩んでも迷うことはないということを、信念に掲げている。進路を誤っても、元に戻せばいい。あとは会社に対する情熱があるかないかだけだ。

野田　自分のやっている仕事が非常に歴史があっても、若い自分にとってみると、何か本当に意味があるかどうかがなかなかつかめない時期があった。80年代にジェトロのアンケートなどを通じ、ロウを日本が輸入してほしいという希望が世界中からあるのを知った。熱帯など貧しい地域の人たちのためになっていることに気づき、自分が仕事をしていることは、先祖が宝物を残してくれたんじゃないかとやっとわかった。

カセム氏

小手川　次の課題というか、社長という職になり27年になるが、引き継いだ自分が何をすればいいか一生懸命考えた結果は、次の代に引き継げばいいんだ、バトンタッチすればいいんだということ。そのときに今の会社をそのまま引き継ぐのであれば、自分の存在価値はないので、少し内容を変えて渡さなければいかんなと。まず少なくとも、純資産を増やすこと。そのためには利益を出さなければいかんと考えた。そこそこ利益が出てきたが、それでいいのかなと。伝統的な企業はお金で測れない含み資産があるのでは、と考えた。いかに含みを増やすか。それは人の力であり、技術の力であり、商品開発力であり、そこに力を入れることが企業の価値を高めることだと。私が入社した当時のしょうゆ業界は各社がにらみ合っていて、お互いになれ合いというか、あまり金を使わないで、穏便にやって生きていこうということだった。しかし、メーカーだから商品開発が一番大事だ。それがメーカーの生きる命で、企業価値を高める含みを増やすことにつながり、次の代に引き継いでいく大事なものではないかと考えた。今後の課題は、そうやって新たな、柱となる商品をつくること。そしてマーケットを海外まで展開していくかは、次の代だろうか。私の代にある程度布石を打っておかなければいけないのか、悩むところだ。

カセム　すべての100年企業に言えるかどうかは別だが、ここにいる3人の方は、ある意味で自分のメーン商品が非常に厳しい環境に関係する商品だ。例えば硫黄温泉は世の中ではすごく厳しい環境。そこが今、生命の誕生の秘訣を持っているバクテリアみたいなものが硫黄温泉にあるのではないかと言われる。そこから商品を生み出したのが飯倉さんのところ。野田さんのところも、ロウは基本的には厳しい環境の植物の対応策。そこを生業化とするという鋭さがある。フンドーキンさんにしても菌を活用している。ある意味で世の中の一番厳しい環境の象徴的なものから自分の生業を生み出した3社だと思う。そこに、何か共通する特別な視点が、あるのではないか。

小手川氏

人材と技術が含み資産

人について言えば、人を裏切れないとか、自分の後世代に先祖が頑張ってきたものをもっと強くして渡したいという気持ちを感じた。人に投資をすることは最近世の中で忘れられがちになっているが、3社から出た一番の教訓ではないかと思う。

小手川　長寿企業各社の話を伺うと、これだけ長くやられているのは、ノウハウに加えて、働いている社員のモチベーションが素晴らしいと感じた。

野田　今の時代はとにかく難しい時代だ。会社を継続していくというのは非常に厳しい。自分たちがやっていることによほど思いがこもらないとならないだろう。ただ、それができればもう少し伸びていく可能性があると思う。

飯倉　私たちは目先だけの小手先の仕事をしようというのではなくて、歴史の重みを感じながら、次の世代にどうやってつなげていくかを考えながら、仕事をしている。最終的には、すべて人間性に尽きる。欲だけでは会社は長く続けられない。それは父や母や先祖からの教えだ。

カセム　皆さん歴史の重みを感じながらさりげなくやっているという感じがする。暗くなっていない。そのさりげなさが、余裕があるということ。その余裕が含み資産に表れる。その含み資産として、知的資産を蓄えてきた企業たちが100年企業だと思う。私も、一生懸命真面目に考えていても、本当はふざけているところもある。ふざけないと新しい発想が出てこない。けらけら笑ったり、ばかげたことを言ったりするところから、新しいことが生まれてくるはずだ。

後藤　私は地域活性化の仕事をやっているが、まさに産官学一緒にやるという場面に立ち会わせていただいた。

内外に普及

日刊工業新聞社社長　井水治博

今回この臼杵市で盛大なキックオフができましたことを有意義なことと考えます。大分県の皆さま、臼杵市の皆さまに感謝いたします。私どもが事務局を務めます100年経営の会は今後も長寿企業の経営手法などを研究し、日刊工業新聞紙面等を通じて情報発信するなどして、国内外に普及させてまいります。また全国各地シンポジウムなど活動を展開していきますが、今回こうしたフォーラムを開いたことを原点として守りながら発展させてまいります。

モノづくり交流会

大分県臼杵市で開催

「100年企業に学ぶ」と題したフォーラムに引き続き3月27日、大分県臼杵市でモノづくり日本会議主催の交流会が開催された。大分県内のさまざまな業種の企業が参加し、プレゼンテーションや情報交換などを活発に行った。同月22日に発足したばかりの大分産業人クラブ（太田清利会長＝ざびえる本舗社長）会員企業からも多数参加した。

臼杵の交流会　臼杵チャレンジ塾

● プレゼンテーション企業

富士甚醤油
ジェイデバイス
エネフォレスト
但馬屋老舗
まるはら
大倉菓機
臼杵チャレンジ塾

宇野氏

冒頭、井水治博日刊工業新聞社社長（モノづくり日本会議代表幹事）が「こうした場を通じて、モノづくり企業を中心とした交流の場を広げていきたい」とあいさつ。今回のフォーラムも、モノづくり日本会議の長寿企業イノベーション勉強会と連動したもので、今後同勉強会と100年経営の会とが連携して、長寿企業の研究を進めていく。

続いて大分県出身でもある宇野郁夫日本生命保険相談役（100年経営会議議員）がフォーラムの内容を受け「生命保険会社は（保障を続けていくために）永続していく宿命がある。断じて（会社が）つぶれてはならない。私共は地道に堅実にやってきた」と企業の存続に関しての示唆を込めたあいさつをした。

地元企業の歴史・事業紹介

交流会のプログラムとしてはまず、大分県内各地の有力企業トップがそれぞれの事業や歴史を紹介した。最初に登壇した渡邊規生富士甚醤油（臼杵市）社長は「129年の歩み」と題して、地元から発してみそ・しょうゆの販売を九州一円、関東、関西などに拡大した歴史を紹介。「今後はアジアにも目を向けていきたい」と抱負を述べた。

渡邊氏

大倉氏

仲谷義文ジェイデバイス（杵築市）社長は「半導体産業は勝ち組はどんどん上っていくが、負け組は―」と事業規模の追求のむずかしさを説明した上で、「（日本の半導体産業は波に乗り遅れたが）今後事業としては面白い」と、半導体組み立て事業の将来性について語った。

再生可能エネルギーを利用した小規模発電システムに取り組む木原倫文エネフォレスト（大分市）社長は、大分県内の施工例を紹介して今後の事業拡大を展望した。

板井良助但馬屋老舗（竹田市）社長は大分の歴史や四季に彩られた同社の和菓子を紹介。「いつものお菓子をいつものように」という社是も披露した。

しょうゆ・みそなどを製造販売する、まるはら（日田市）の原絵美氏は同社の経営理念として「不易流行」を挙げ、みそ・しょうゆの醸造期間中に手もと材料を使いラムネを製造した歴史も紹介した。

大分産業人クラブ会員からは大倉崇史大倉菓機（別府市）専務が菓子・食品機械の製造販売を行っている事業を紹介。ベーカリー・カフェの運営など新事業も展開し、今後「地場の野菜、農産物を活用した食品の開発に（食品機械のユーザーと協力して）取り組みたい」と抱負を語った。

地元臼杵市の臼杵チャレンジ塾は若手産業人の異業種交流を目指して2009年に発足したもの。「100年企業に学ぶ」と題した醸造・造船などの地元長寿企業の見学を通じた交流は活動の目玉の一つという。

モノづくり日本会議
―モノづくり推進会議 NextStage―

モノづくり日本会議
―モノづくり推進会議 NextStage―

「不屈のモノづくり」を募集します

わが国は戦後、飛躍的な発展を遂げました。これは、企業が機械・電機・自動車など優れた製品を国内外に送り出した結果であります。しかし、発展の中で完成品が脚光を浴びることはあっても、その機能の基となる部品や部材に光が当たることはありませんでした。

モノづくり日本会議と日刊工業新聞社では、わが国のモノづくりの強さを再認識し、わが国の産業・社会の発展に貢献することを目的として、「縁の下の力持ち」的存在である部品・部材に焦点を当てた「超モノづくり部品大賞」を実施しています。持続可能な社会システムづくりを目指すNPO法人ものづくり生命文明機構のご協力もいただき、対象分野は「機械」「電気・電子」「自動車」「環境関連」「健康・医療機器」「生活関連」の6分野で実施しています。
日本のモノづくりに寄与する部品・部材を幅広く募集します。

主催：モノづくり日本会議／日刊工業新聞社
後援：経済産業省／日本商工会議所

支える

募集期間
2012年3月1日～6月1日
●審査期間　2012年7月～9月
●発　　表　2012年10月中旬

応　　募　下記①、②いずれかの方法で申請書をお取り寄せ下さい。
①ウェブページからダウンロード　本賞のウェブページ（www.cho-monodzukuri.jp/award/）から pdf、word形式でダウンロードいただけます。
②事務局から郵送　モノづくり日本会議事務局まで電話またはメールにてお問い合わせ下さい。

映像制作　2011年の映像はウェブページ上でもご覧になれます。
受賞部品の中から特に優れた部品を対象に、開発企業の想いや部品の特徴を紹介する映像を制作し、贈賞式やウェブなどで配信します。

2011年部品大賞
JX日鉱日石エネルギー
「パラフィン系潜熱蓄熱材エコジュール」

超モノづくり部品大賞
MONO DZUKURI
太古の時代から大地に根を張ってきた巨木。
黒風白雨、自然の猛威にさらされても
変わることなく立ち続けてきた。
大樹が豊かな自然を育み、
小さな部品が豊かな未来を築く。
自然から学ぶ不朽のモノづくりを。

お問い合わせ　モノづくり日本会議 超モノづくり部品大賞 事務局　〒103-8548 東京都中央区日本橋小網町14-1（日刊工業新聞社内）
TEL.03-5644-7608　FAX.03-5644-7209　e-mail：buhin@media.nikkan.co.jp
http://www.cho-monodzukuri.jp/award/　部品大賞　検索